2017年6月18日

中原キリスト教会信徒研修会

**「モーセの十戒」**

聖書箇所：中原キリスト教会朗誦「十戒」、カソリック要理「十戒」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日は信徒研修ですが、旧約聖書のなかでも最も有名な箇所の一つである「十戒」が選ばれました。「十戒」は出エジプト記の20章と申命記5章の二箇所にありますが、「十戒」と言うと、出エジプト記の方が一般的に使われております。十戒をひとつ、ずつお話しして居ましたら、1年はかかることになりますので、今日は、それぞれの「戒め」について注意すべき点をお話しし、あとは全般的なことから私たちが学ぶべき点を申し上げたい、と思います。

　まず、十戒という十はどれなのか、ということです。中原キリスト教会で月一回朗誦していますのは改革派の十戒を、短縮形にしたものです。日本語訳は口語訳です。これは16世紀ドイツで成立した「ハイデルベルク信仰問答」に基づく、十戒を、短縮したものですが、これがプロテスタントの主流の短縮形表現と言って良いでしょう。今日は新改訳聖書で、短縮しないものを基本としておはなし、したいと思います。ローマ・カソリックは申命記5章の「十戒」を省略したように思われます。プロテスタントのものと比すると、第二戒と第九戒が異なります。カソリックの方は「刻んだ像」のことがなく、「人の妻」のことがあります。これは省略の仕方での相違であり、原文には両方にあります。その他ちょっと変わったものなのは、若干の神学者が十戒ではなく十二戒なのだ、という説もあります。偶像崇拝禁止を強調しています。イスラエルの十二部族という事から十二戒とするのも解らない訳ではありません。それでは十戒というのはどうしてか、と言う点ですが、出エジプト記34:28に「モーセはそこに、四十日四十夜、主とともにいた。彼はパンも食べず、水も飲まなかった。そして、彼は石の板に契約のことば、十のことばを書きしるした。」とあります。この「十のことば」から、十戒と言われるようになりました。ここまではっきり書かれていますからやはり十戒とするのが妥当と思われます。しかし、この問題は本当にこれらは「戒め」なのか、ということです。「神のことば」と理解する方が良いのではないか、ということです。創世記26:5に「これはアブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの戒めと命令とおきてとおしえを守ったからである。」とあります。「戒め」、「命令」、「おきて」、「おしえ」の４つがここで出てきています。出エジプト記の「ことば」はこのどれとも同じことばではありません。通常の言葉という意味であり、「戒め」というようなニュアンスはありません。十の「神の言葉」が伝承のなかで「戒め」として理解されるようになったのだ、と推察してよいのではないか、と考えます。このことは「十戒」の理解を、守らなければならない法、というのとは異なる理解に導くものです。

　神様は言葉で、この世界を御創りになりました。神様は十戒の言葉で、この世に「秩序」を作られたのです。これは人間が生きていくためにも必要なものです。十戒の一つ一つは、神様と人間の関係、そして人間と人間の関係に秩序を与えるものです。このモーセの十戒はハムラビ法典やアッシリヤ法典のような古代中東における各種法典の影響を受けていることは事実でしょうが、単にそれらから抽出したものではなく、イスラエルの信仰によって再構成されている、と見るべきものです。即ち、イスラエルの主なる神が、イスラエルが生きていくための秩序を与えるものだということです。イスラエルが守られていくための秩序を与えたものです。イスラエルが神の恩寵に留まるための秩序を示しているということもできます。強調すべきことは、十戒はこれをやぶると罰が与えられるという戒めとして与えられたと言うより、イスラエルが生きていくための神の恵みとして与えられ、イスラエルがこれを守ることにより神の恵みに留まる祝福を得る手段として与えられたのだ、ということです。「戒め」と「ことば」の差はこのように理解できるでしょう。これをわきまえたうえで「十戒」と称することは差し支えありません。

　ではこの「十戒」の一つ一つの理解の中で、注意すべき点を述べます。もちろんあげるときりがないくらい沢山ありますが、これは誤解を起こしやすい、とか見過ごしやすい点だ、と思われる点のみに限って述べることとします。まず、第一戒です。20:2-3です。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。/あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」とあります。この箇所は唯一神信仰を表明した箇所と考えられています。しかし数多くある神様の中でイスラエルにとっての神はこの主なる神のみである、ということなのか、この世界にはイスラエルの主ヤハウェのみが神であって、他に神と言える存在はないのだ、ということを言っているのか問題になります。十戒がモーセに与えられた時代的状況よりすれば、主なる神ヤハウェがイスラエルの神である、と言っているのみで世界には他に神々が存在することを否定しているのではない、と理解することが自然な解釈です。しかし、聖書は創世記のように世界大の創造物語を記している文書もあります。そもそも聖書はイスラエルの信仰文書という流れと、異邦人を含む世界大の信仰文書という流れが入り組んでいます。そうすると、この第一戒はイスラエルが神とするのはこの主ヤハウェだけである、という信仰告白の形を取りながら、世界を創造された主なる神が選ばれた民イスラエルを通して、この世界を創造し守る唯一の神であると宣言しているものだ、ということができると思います。いわば、二重の信仰が選びの民を媒介として繋がっている、ということです。

　第二戒は20:4-6です。「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。/それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、/わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」とあります。短縮形では「あなたは、自分のために、刻んだ像を造ってはならない」です。所謂偶像崇拝禁止です。マリア信仰は偶像崇拝か、天皇崇敬はどうか、お焼香はどうなのか、果てはお日様に手を合わせているお年寄りはどうなのか、等々、これについては多くの議論があることご存じのとおりです。ここで私が申し上げておきたい事は、現代の我々にとって最も問題とすべき偶像は「お金」と「国家」だということです。モーセの当時、偶像と見られていたのは、農業神や女神です。農業神は私たちの命を支える食物を齎してくれる神だから崇拝されていたのです。女神はもちろん、子供を産むからです。即ち、命を生み、守るものだから偶像崇拝されたのです。現代の社会は商品経済で完全に覆われ、お金があれば生きる糧は手に入れられるため、「お金」が偶像に地位についています。「国家」については近代以降、教育、福祉をはじめかつては教会の役割であった事柄が国家の機能に収斂されていき、ほとんどすべての社会的事項が国家の傘下に入っています。ナショナリズムと言う形で国家主義があおられています。私たちキリスト者は自らを反省するとともに、この二つを崇拝し、実質的にこれらの奴隷となっている社会に警告を発する義務があると思います。

　第三戒は20:7です。「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。」とあります。ユダヤ人はこれを徹底して理解し、イスラエルの主なる神の名であるヤハウェを発音することも回避しました。この神聖四文字と称せられ、この言葉を読む時は「主」（adona:y）と読むのです。日本語聖書でもこの語は「主」と訳されています。新改訳ではゴチックになっています。従ってゴチックでない「主」は通常の主人という意味の「adona:y」です。ユダヤ教ではヤハウェと発音できるのは大祭司が年に一回、至聖所で唱えることができるだけ、ということです。エホバの証人が公然と「エホヴァ」と訳し、読んでいます。イスラエルにとって名は極めて重要です。それは「神の言葉」を意味しているからです。旧約聖書には名前の由来を説明したところが沢山あります。日本でも「名は体を表す」という言い方もします。この第三戒の意味するところは信仰に関わる言葉をいい加減に使ってはいけない、ということです。その最たるものは、自らの権力の正当化のために宗教を利用する時の信仰的用語です。戦争正当化における「神よ守りたまえ」とか、差別を正当化する時の「選び」とか「使命」とか、人間的支配を正当化するための「導き」など等です。神の言葉が容易に支配者の言葉になっている現実もあります。これらを区別するには「祈り」しかありません。なにか釈然としないものが残っていれば「あやしい」と思った方がよいでしょう。

　第四戒は20:8です。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」です。ユダヤ人の安息日は金曜日の日没から土曜日の日没までです。従って、実質的には土曜日です。20:9-11までは安息日の定めの理由です。神の創造の業が終えられて休まれたことから安息日が定められた、とされています。申命記のほうの十戒ではこれに加え、5:15で「あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は、安息日を守るよう、あなたに命じられたのである。」とあり出エジプトの記憶をとどめるため、という理由が付加されています。古代ユダヤで安息日を守ったため戦争に負けて占領されたと言うエピソードが残っているくらいユダヤ人は安息日を厳格に守りました。イエス様は安息日は神の民の命のためにあるのだということから、当時の安息日墨守のパリサイ人の態度を批判しました。キリスト教ではこれに代え主の復活を記念する日曜日が「主の日」として定められたのです。しかし、神の恩寵の一つとして定められた「休息」としての安息日の意味は継続しています。日曜日は一週間のこの世での働きを終え、神の前で礼拝の時を持ち、休息を得る時でもある、ということです。内村鑑三が学生時代、日曜日には勉強をしなかった、という話もあります。

　第五戒は20:12で「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。」とあります。十戒は最初の四戒が神と人間の関係に関することで、五戒以降が人と人の関係を律するものだという理解が一般的ですが、この「父母を敬え」を神と人の関係のグループに入れる理解もあります。なぜ神様は父母を敬え、というのでしょうか。現代の一部風潮のようにお年寄りは社会の余り者とされるような傾向からすると、なにを時代錯誤なことを言っているのか、と言われます。これは、イスラエルの神信仰は親から子に伝えられていくべきものだからです。ユダヤ人の祈りのリードするのは父親の役割である、とか、ユダヤ人の定義は母がユダヤ人かどうかに基準があるとか色々なことが言えますが、中心的なことは神信仰の継承です。このことは、現代の我々についてもいえることです。私のように個人主義的信仰で満足してしまっているのは問題です。ここで父母を教会の牧師・神父などにおきかえれば、教会員への定めになりますし、いろいろな集団の指導者に置き換えると、この集団のメンバーに対する教えにもなります。逆に言えば、父母や指導者の責任の大きさ、を述べている、という事も出来ます。神の義を実現し継承する責任が課されている、といえます。大変なことです。

　第六戒は20:13で有名な「殺してはならない」です。ここで「殺す」というヘブル語は「ra:tsaha」という言葉で「虐殺する」というような意味合いの非常に強い表現です。その他、殺すという言葉には、「ha:rag」、「mu:t」、「na:ka:」という言葉があり、「ra:tsaha」は最も使用頻度の少ない「殺す」と言う言葉です。その用例をみますと戦争における死とか、神の裁きによる死には用いられず、個人的仇を殺すことや故意・過失により人を殺した場合に使用される言葉です。このことから、戦争による殺人は十戒の禁止事項ではない、と言われています。またこれはイスラエルの共同体内部の事で異邦人を殺すことはこの範疇ではない、とも解釈されます。おそらく、時代に即した解釈と言う意味からは正しい、と思います。しかし、イエス様はこの教えを、「敵を愛する」という教えにまで拡大しています。また戦争について言えばミカ書、イザヤ書に示されたように預言者の信仰は軍事力放棄、戦争否定の考え方に行きついています。そうすると、この「汝、人を殺すなかれ」は世界大の広がりを含んでおり、人類最大の問題である、戦争を否定する「希望」を掲げた教えだ、と解釈することもできます。

　第七戒は20:14の「姦淫してはならない。」です。旧約聖書に示されている律法によれば姦淫とされるのは既婚の男女が既婚の異性との間で性的関係を持つことを指しています。「十戒」はイスラエルの男子に言われたことですから、ここではイスラエルの男子が他のイスラエルの男子の妻と性的関係をもつことを意味する、と解釈できます。おそらく、イスラエルの男子が兵役に行き、妻が留守を守っているような状況を想定したものでしょう。従ってこれ以外の男女の関係の事柄はこの定めによって禁止されていることではない、と解釈することもできます。刑法の場合は極力厳格に解釈するのが原則ですから、このような場合に限定して適用すべし、という事になります。また、未婚の男女の性的関係、離婚者の既婚者との性的関係、妻以外の女性との性的関係とか多くの問題ある事柄が、この定めの範囲外のことと考えられます。果ては同性愛の関係は姦淫と見做されるのかという問題もあります。イエス様はこの定めを内面的に理解し、情欲の問題にまで深め、御言葉を発しています。この第七戒の解釈として一夫一婦制がこの定めの理想とされているかどうか、と言う点です。聖書解釈としては無理だと思います。しかし、男女がほぼ同数生まれてくるという不思議さを顧慮すると一夫一婦制が在るべき創造の秩序なのではないか、と考えます。戦争により多くの未亡人が発生した場合などの救済策として旧約の時代には多妻が認められていた、というのが事実でしょう。

　第八戒は20:15「盗んではならない。」です。これは本来誘拐を禁止する項目であった、という説がありますが、凝り過ぎの解釈だと思います。現代的問題として「搾取」は「盗み」の一つか、という問題があります。これはマルクス主義において、資本家階級が労働者階級を搾取することにより超過利潤を得ている、という資本主義経済の理解から来たものです。さらに遡れば、所謂「労働価値説」に由来するものです。要するに価値は「労働」が産むものだ、という考え方です。所謂近代経済学は貨幣を対価として売買される物やサービスにはすべて価値がある、との考え方です。「汗水流して働く所にこそ価値の源泉が在る」とも気持ちもわからないではありませんが、資本主義経済は「搾取」を必然的に含み、それは「盗み」と同じだ、というのは十戒の拡大解釈と言わねばならないように思います。では「植民地主義」はどうでしょう。現代でも欧米植民地主義の負の遺産が多数あります。植民地主義が収奪のメカニズムであり、これは盗みに相当することである、と言えそうな気がします。特に中南米での植民地主義は大問題です。またアメリカ合衆国の場合もアメリカン・インディアンへの対処方法は「盗み」と断じて差し支えない、と思います。土地の私的所有と言う考え方のない人々から土地を正当な対価で買ったなどと言うのは詐欺以外の何物でもありません。カソリックもプロテスタントもこれを文明の名において正当化してきたことは紛れもない事実です。贖罪の行いが求められるのは神の摂理だと思います。

　第九戒は20:16の「あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。」です。ここで「偽りの」と訳されているのは「sheqer」（嘘、偽り）という言葉です。申命記の方は5:20ですが新改訳では「偽証」と訳され出エジプト記の方と同じ単語のように見えますが、ヘブル語では異なる言葉「sha:we:」（偽り、空虚、無価値）が使われています。出エジプト記のように「偽りの証言」という言い方は他の用例もありますが、申命記の十戒にあるような「空虚な証言」という表現は申命記のここに一か所あるだけです。この差は奈辺に由来するのかはわかりません。いずれ機会があれば一生懸命調べてみたいと思います。それより重要なのはここでは「隣人」です。使われている言葉は「re:a」（仲間、友人）です。イエス様の良きサマリヤ人の喩えのなかで「隣人」と言う言葉が使われています。新約聖書のヘブル語訳というのがありますが、そこで「隣人」は「re:a」と訳されています。ギリシャ語では両方とも「ple:sion」（近く、近所の人）という言葉です。問題はイスラエル共同体の中の者のみか、それ以外も含み一般的な定めと理解するか、と言う点です。聖書解釈としては第一次的にはイスラエル仲間うちの事だけを言っていると解釈せざるを得ません。イエス様はサマリヤ人がユダヤ人にとって異邦人同様と見做されていたためたとえ話の意味があるのです。即ち異邦人同様と見做されていたサマリヤ人こそ「隣り人」である、というのです。従ってイエス様の目からはこの定めは異邦人を含む普遍性を持った定めになっていたという事です。「うそも方便」はイスラエルの辞書にはないようです。

第十戒は20:17です。「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」とあります。短縮形では「あなたは、隣人の家をむさぼってはならない。」です。実はローマ・カソリックやルター派では「家を欲しがる」のと「隣人の妻を欲しがる」のが別の戒めになっています。短縮形では“隣人の家にあるもの”の意味のようにも感じますが、聖書の文言としては「隣人の家」は欲しがるも目的語ですから家そのもののことです。要するに、他人の財産を欲しがるな、と言っているのです。妻も財産の一つと見做されている、と解釈されます。カソリックの場合、妻については特別扱いしている、ということでしょう。申命記では妻が特別に述べられています。妻については性的意味合いもありますので特別扱いされている、という事かもしれません。カソリックが二戒に分けているのはそのような意味からかもしれません。カソリックでは「むさぼり」は大罪の一つとされています。「欲しがる」と訳されている語は「ha:mad」（欲しがる、欲する、宝とする、選ぶ）という単語です。十戒の他の項目は何らかの形で具体的行為となっているところをとらえて定め、としているのですが、第十戒だけは「むさぼり」という内心のことを述べているように読めます。ルターは彼の言う第九・十戒、此処で言う第十戒は“罪悪の根源、即ち心中の悪欲ならびに願望に関係する”と言っています。どうも釈然としません。むしろ、無断借用を禁止している、と理解できないでしょうか。盗むは自分のものとしてしまう事ですが、ここでは利用のみを問題としているということです。家について言えば住人が旅行している間に占拠して無断無料で利用することであり、妻について言えば夫が留守の間に自らの妻として自分の面倒をみさせる、というようなことです。要するに具体的行動に直結した強い欲望のことだ、と理解する訳です。我流解釈です。

以上が通常、十戒と称する「十のことば」ですが、全体を通して申し上げておきたい事があります。ヘブル語の話になりますが、英語で言う現在完了形などと言う時制、ヘブル語での態についてです。十戒のほとんどは、命令法ではなく未完了態で表現されている、と言う点です。未完了態はそのそもは未来表現の態ですが、そこから派生して“起こるべき行為、英語ではshall”に相当する表現、更には実質的に命令・禁止の意味にも使われます。その他、過去の事態や継続・習慣の表現にも使用されます。注意いただきたいのはヘブル語には命令形は別途ありますが十戒の大部分は命令形ではなく、命令の意味も持ちうる未完了態である、ということです。例えば「殺してはならない」はヘブル語から直訳すると「あなたは殺すことはない」とか「あなたは殺すことがあってはならない」と言うようにも訳せるということです。この方式で訳しますと、「あなたには、私の顔の前に、他の神が存在することはない」、「あなたは、自分のために偶像を作ることはない」というようになります。これらの訳で分かるように、十戒は神の命令というようなことでは片付かないものがあります。「あなたは、---しない」というのは人間の自由意志の存在を認め、神様が、人間が自らの意志でこれらの定めを守ることを望んでいらっしゃる、というように解釈できるという事です。神様はこれらの定めを守ることを神の民が喜びとすることを望んでいらっしゃる、ということです。安息日は楽しむ時であるという訳です。殺し合いはなくイスラエルの平和を享受すればよいのです。しかめっ面して十戒を厳格に守らなければならない、と構えるのではなく、十戒を守ることによって得られる状況を楽しむべきなのです。例外もあります。父母を敬え、のところは命令形です。安息日を覚えて聖とせよ、の所は二つの不定詞の利用であり、「安息日を覚えること、それを聖とすること」という表現で実質的に命令に近い意味です。その主語は隠れていますが「あなた」即ち我々人間です。これらの事は当初もうしあげた恵みとしての十戒、ということがよく伝わってきますし、何と言っても神様は人間の自由意志を尊重されていらっしゃる、ということです。

もう一点、ユダヤ教のラビが言っていることで大変重要なことがありますので紹介いたします。十戒の箇所の前の19:8に「すると民はみな口をそろえて答えた。「私たちは主が仰せられたことを、みな行います。」とあります。神の命令だからとにかく「みな行います」と言っています。このラビによると、これは盲従、目くらで従う、ことでありイスラエルの信仰ではない、と言います。十戒の箇所の直後の20:19には「彼らはモーセに言った。「どうか、私たちに話してください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお話しにならないように。私たちが死ぬといけませんから。」とあります。この「聞き従います」と訳されているのはヘブル語では「私たちは聞きましょう」という表現です。このラビは、ここでイスラエルはモーセから聞くことのみで神の言葉を自らで聞こうとしていない、と評します。十戒より４章後の24:7では「そして、契約の書を取り、民に読んで聞かせた。すると、彼らは言った。「主の仰せられたことはみな行い、聞き従います。」とあります。ここではイスラエルの民が「行い、聞く」と記されている。これがイスラエルの信仰である、というのです。順序を逆にして「聞き、行う」とすればわかるようにイスラエルの信仰は聞き、理解・納得し、そして行う、というものだ、盲従とは違うのだ、というのです。ここにもイスラエルの主体性を神様が尊重しているのだ、という信仰が示されています。言葉の取り上げ方もさすがラビ、と言いたくなります。先ほどの恵みとしての十戒、神様の人間の自由意志の尊重とあわせ考えると、十戒が単なる戒め、命令ではなく、イスラエル信仰の神髄を顕していることが了解されると思われます。このことが主イエスの十戒の霊的深みにおける理解に繋がって行くのです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

資料のうち、「十戒」の翻訳などについて記したものの最後の方のことを若干ご説明いたします。後ろから4枚目ほどのところに「十の指示」というのがあります。これはイスラム教の経典「コーラン（クルアーン）」にのっているイスラム教徒へのムハンマドにより伝えられたアッラーからの「指示」であり即ち「戒め」です。第一の指示は「アッラーと一緒にほかの神をたてたりしてはならぬ」というものです。十戒第一戒に似ていますね。その下に記載されているのはコーランの第17章「夜の旅」第23節（他の編集では22節）に記載されている、と言う意味です。「十の指示」をみてみましょう。かなり十戒に似ていると思われるでしょう。一つ注意しておきますと、コーランの場合は後ろに行くに従い、記述された時代が昔になる、ようにまとめられています。従って、「家畜の章」は「夜の旅」章より古い預言です。時代的には10年程度のはなしですが。また、コーランには旧約聖書のモーセ、ノア、アブラハム、それから主イエスが預言者として出てきて、ムハンマドが最後の預言者ということになっています。

次には、「モーセの十戒」がコーランではどこにあるか。を捜し、記述したものです。あちこちに散らばっています。若干意味が異なるものがあります。例えば第四戒“安息日遵守”ですがイスラムには「安息日」という考えはありません。ユダヤ教と大きく異なる点です。しかし、共同礼拝日というのがあって金曜日です。イスラムの成人男子はみんなモスルに集まって礼拝します。ユダヤ教の安息日は土曜日ですから、共同の礼拝の日ということから見ると、イスラムが金曜日、ユダヤ教が土曜日、キリスト教は日曜日になります。第三戒の「主の名をみだりに唱えてはならない」は対応コーランはありません。アッラーという言葉は何度使ってもOKです。そもそもはイスラエルで言えば「e:r」（神）のことです。

次のページの「六信五行」は雄イスラムの男子がの守らなければならない事柄です。

次はハムラビ法典です。これはBC1750年頃古バビロニアにおいて作られたものです。「モーセの十戒」がそれぞれはハムラピ法典の第何条に対応するかで見てみました。はムラピ法典には神と人との関係についてははムラピ法典にはありません。「争議の章」の196、200は有名な「目には目、歯には歯」です。なお条文番号は一連の番号であり章毎に一からという訳ではありません。「殺してはならない」は偽証言の見地から間接的に言われています。

カルヴァンの『キリスト教綱要』のなかから十戒について書いてあることを抜書きしておきました。カルヴァンは宗教改革者であり改革長老派のさきがけとなった人物です。ローマ・カソリックに対抗する意味合いと、当時の宗教改革最左派再洗礼派に対する批判を意識して書かれています。現代に直接適用しようとするには無理があります。